

島邨俊一小伝

— 悲運の精神病学者 —

岡田靖雄

島邨俊一はわたしにとって謎のおおいい人であった。その姓は論文によって「島村」であったり「島邨」であったりする（一、二「嶋村」もある）。帝国⁽¹⁾大学⁽²⁾医科⁽³⁾大学⁽⁴⁾で榊俣（一八五七—一八九七）が最初の精神病学講義をしたのは一八八六年一二月三日で、一八八七年九月一〇日に医科⁽⁵⁾大学⁽⁶⁾助手となった島邨は、榊にまなんだ助手としては第一号といつてよい。そして留学前には『東京醫學會雜誌』ほかにはなばなしい活躍がみられるのに、帰国して京都府⁽⁷⁾医学⁽⁸⁾学校⁽⁹⁾教諭となつてからはその活動がみえず、日本神経学会にもほとんど姿をみせていない。榊をついだ呉秀三とよくなかつたのだらうか。かれの論文「島根⁽¹⁰⁾下狐憑病取調報告書」は一八九一年に一か月半にわたり出雲・石見・隠岐の三国をまわつた現地調査にもとづくものなのに、その後の憑き物研究でこの論文はどうして無視されているのか。島邨への関心はこういつた謎から出発した。

これからの記述のために姓の表記の件だけまずかたづけしておこう。島邨俊一は洋医学者島村鼎甫の没後に嗣子⁽¹¹⁾となつた。鼎甫の姓はだいたい「島村」としてある。もつとも適塾姓名録に鼎甫は「嶋村貞蔵」と記名している。当時⁽¹²⁾わりあい自由に異字体をつかつていたのである。俊一の姓は京都府⁽¹³⁾立⁽¹⁴⁾医科⁽¹⁵⁾大学⁽¹⁶⁾保存の履歴書（もつとも、これは自筆では

ないようである)、官報所載学位記などでは「島村」となっている。『大日本博士録』第二卷(発展社・東京、一九二二年、あとは単に『大日本博士録』とするす)には「島村」でのつており、そこにある署名もおなじである。また俊一がたてた養父の墓および自家の墓は「島村」となっている。現在これらの墓をまもっておられる島村湘一郎氏にうかがうと、その他の親戚は「島村」としており、「島村」の表記は趣味の問題だといわれている、とのことであった。すると、正式の表記は「島村」だが島村俊一は「島村」の表記をこのんだということなのだろう。そこで本稿ではご本人の好みにしたがって「島村」としてしておく。

つぎに名の読み方も問題になる。『大日本博士録』のイギリス語欄には“Toshichi Shimamura”と記している。だがドイツ語の論文はすべて“S. Shimamura”となつていて、『京都醫學會雜誌』所載の鑑定書に“S.”の署名となつているものもある。すると「シュンイチ」とよんだのだろうか(もつとも、齋藤茂吉が養父紀一にいわれて、あらたまつたときには「シゲヨシ」としたように、「トシイチ」とよぶこともあつたのかもしれない)。

ところでその生涯をたどる資料はおおくない。まず、おもなものをあげておこう。京都府立医科大学にはその履歴書が保存されているが、その字は『大日本博士録』がのせる自署とまったくことなる(あとは「履歴書」とするす)。内村祐之「神俣先生と東京帝国大学医学部精神病学教室の創設」(『精神神経學雜誌』第四四卷第一号、一九四〇年)がひく神俣日記に島村についての記述がいくつみられる(あとは「神日記」とする)。留学中の詳細はわからないが、『東京醫事新誌』第八六七号(一八九四年一月一日)および『中外醫事新報』第三五二号(一八九四年一月二日)の帰朝記事(あとは、「帰朝記事」と略す)に、師事した人の名はでている。京都府立医科大学校時代については、『京都府立医科大学八十年史』(京都府立医科大学創立八十周年記念事業委員会・京都、一九五五年、あとは『八十年史』と略す)および『京都府立医科大学百年史』(京都府立医科大学長・京都、一九七四年、あとは『百年史』と略す)に示るされている。島村の生涯のほぼ全体は、島村医学博士肖像除幕式典における加門桂太郎の表頌演説(『京都府立醫學專門學校校友會雜誌』第

八一号、一九一七年、あとは「加門演説」と略記する）からうかがうことができる。
まずこれらから島邨の略年譜をつくると、表一のようになる。

表一 島邨俊一略年譜

- 一八六二年一月二四日（文久一年一月二五日）東京生まれ、中村姓（群馬県出身）
- 一八八五年七月一六日島村鼎甫の養女こうと入夫婚姻
- 一八八七年（明治二〇年）三月一六日帝^国大^学医^科大^学を卒業
- 九月一〇日精神病学教室榊俣教授の助手となる
- 一八九一年七月一四日から九月二日まで島根県下狐憑病取り調べ
- 一〇月二四日ヨーロッパ留学にたつ（自費）
- パリよりベルリン二年↓ウィーン
- 一八九四年（明治二七年）十一月二日帰朝
- 一二月二一日京都府医学校教諭
- 一八九五年二月一六日京都府立療病院神経及精神科部長
- 一八九九年九月一日京都府立療病院副院長
- 一九〇〇年（明治三三年）五月二四日京都府立医学校校長
- 九月二四日京都府立療病院副院長を免ぜられる
- 一九〇三年五月京都府立療病院院長兼任
- 六月二〇日京都府立医学専門学校校長兼附属療病院院長
- 一九〇六年（明治三九年）八月九日京都帝国大学京都医科大学より医学博士の学位をうける（上行性神経炎ニ因スル脊髄炎ノ橋部及ビ脳脚部特ニ動眼神経核ノ血液供給ニ就テノ所謂片山地方病ノ病理解剖、脳動脈「エンボリー」及ビジャクソン氏癩癩原因ノ追加ノ広汎性硬皮症ノ病理追加、の論文により）

一九〇八年四月四日第四回日本神經学会總會を欠席（宿題報告「癩癩の治療法」の予定）

一九一〇年（明治四三年）三月九日校長・院長・教諭を辞職

五月学校講師・附属療病院顧問・療病院神經及精神科部長

一九一六年二月二八日講師・顧問・部長を辞職

一九一七年（大正六年）一月一日学内に寿像建立（除幕式に本人欠席）

一九二三年（大正一二年）三月一日逝去

警香院峰譽日俊居士

一、その前半生

島邨は一八六二年一月二四日（文久一年二月五日）東京で中村家にうまれた。中村家は群馬県前橋の出身であるが、母の名が花子であることのほかは、その両親についてはたしかめられなかった。生年月日は「履歷書」にだけ万延一年二月二五日となっていて、とすれば一八六一年二月四日になる。だが、学位授与告示の官報、『大日本博士録』その他はすべて文久一年としている。さらに死亡記事にはすべて享年六三とあり、万延一年なら教えて六四歳となるはずで、「履歷書」の記事は誤りとみなくてはならない。ところで、『京都府立醫學専門學校校友會雜誌』第八一号（一九一七年）の「島邨医学博士寿像除幕式典」記事には、「去る十一月十一日博士誕生の佳辰を卜し」とある。文久一年一月一日（一八六一年二月二日）の生まれだが、戸籍などの届けは同年二月二五日となったということなのだろうか。

中村俊一は東京大学医学部在学中の一八八五年七月一六日島村鼎甫の養女こう（幸子）と結婚し、島村姓となった。鼎甫（一八三〇—一八八一）は備前出身の洋医学者で適塾にまなび、医学所教授をつとめ、『生理發蒙』（一八六六年）、『創痕新説』（一八六六年）の訳書がある。鼎甫の妻遊喜子は喜多流謠曲宗家喜多六平太の娘であった。二人のあいだに子はなく、

永井徳壽（一八九〇年卒業、生理学）、望月惇一（一八九一年卒業、内科、校長）、秋元隆次郎（一八九二年卒業、産婦人科）、伊藤元春（一八九三年卒業、眼科）、池田廉一郎（一八九六年卒業、外科、のち新潟医学専門学校）、工藤外三郎（一八九七年卒業、内科）。これはのちにふれなくてはならない大問題であるが、かれの前後の人で京都帝国大学にうつつた人のおおいことが目につく。

卒業後のことは「榊日記」にみられる。「四月二十六日 学生島村来ル」。「四月二十七日 島村氏へ『デメンチア』ノ問題ヲ与へ大学院入ヲ許ス」。「履歴書」には、五月三日大学院入学、九月六日願により同退学とある。東京府癲狂院（一八八九年三月一日東京府巢鴨病院と改称）と東京帝国大学医科大学との関係はわたしの『私説松沢病院史』（岩崎学術出版社・東京、一九八一年）にくわしくのべたが、一八八七年四月三〇日から東京府癲狂院の患者の治療は医科大学が責任をおうことになり、榊俣は同院医長となつた（院長制は廃止）。そして医科大学精神病学教室は同院内におかれたのである。癲狂院記録では、八月三日から大学からの依頼で大学院生島邨が医務補助として隔日に出頭していた。九月一〇日島邨は医科大学助手に任ぜられ、第一医院勤務を命ぜられた。精神病学教室の助手とされた人にはすべて、医科大学第一医院勤務という形式がとられている。癲狂院記録では島邨は九月二日より当直医となる。

ここで島邨と同時期に精神病学教室にいた人を見ておく。前年に医科大学を卒業した三田久泰が一月二二日にはじめての助手となっている（五月二日より癲狂院へ出張、一八八九年二月二五日辞任、佐賀県柄崎病院の精神病部を担当、一八九三年一月四日死去）。ついで、まえから東京府癲狂院医員だった人のうち、片山正義（一八八六年帝国大学別課医学卒業、同年癲狂院就職、一八八九年辞任）、田邊耕民（出身校不明、一八八七年一月癲狂院就職、一八九二年辞任、山田謙哉と『精神病学治療全書』を一八九四年にだした）が助手となった。高山蠟夫（一八八〇年東京大学別課医学卒業）が一八八七年五月に助手となつたらしいが、間もなくやめている。あと杉本宇吉（一八八七年別課医学卒業、一八八九一年と雇として在任）、大西鍛（一八八八年医科大学卒業、一八八九年助手として在任、のち大阪府立医学校病院精神科部長）、井上甲之助（一八八六年別課医

学卒業、一八八九年雇として在任)、小野寺義卿(あるいは義郷、出身校不明、一八八九—一九四年助手として在任)、舟岡英之助(一八八九年医科大学卒業、一八九〇—一九三、九四—一九九年と助手として在任、のち岡山医学専門学校教授として生理学を担当)、呉秀三(一八九〇年医科大学卒業、一八九一—一九六年と助手、のち助教授をへて教授)がいた。このほかに植木鐵哉、濱地和一がなんらかの形で一八八九年ごろにいたらしい。

榊が医長になるまえ中井常次郎院長時代の東京府癲狂院では、精神疾患は癲狂(躁狂)、鬱狂、偏狂、痴狂とわけられていた。榊は鬱狂、躁狂、錯迷狂、癲癇狂、歇斯的里狂、麻痺狂、老耄狂、続発痴狂、酒精中毒、白痴、アトロピン狂という分類をとった。

島邨の助手時代に論文面でもっとも活躍していたのは、三田とならんで島邨であった。三田の生涯については、調査をふかめたうえでいつか発表したいが、三田の主要論文は、酒精飲用後躁狂状態(一八八七年)、熱性病の精神病への影響(一八八八年、一八九〇年)、肺結核と精神病(一八八八年)、訴訟狂全癒例(一八八八年)、感伝性(感応)精神病(一八八九年)、精神錯乱(一八八九年)、アテトーゼ(一八九一年)に関するものであった。

島邨の最初の論文は「回帰狂実験」(『東京醫學會雜誌』第二巻第七号、同第八号、一八八八年四月、はじめ三月八日東京医学会例会報告)であった。島邨の仕事の内容はあとにまとめるので、ここでは助手時代の主要論文の主題をあげておこう。ヒオスチンの効果(一八八八年)、性欲抑圧の精神神経面への影響(一八八八年)、大脳半球の局部脳質脳膜炎によるジャクソン癲癇(榊と共著、一八八九年)、水銀中毒の精神症状(一八八九年)、バセドウ精神病(一八九〇年、一八九一年)、心臓病と精神病(一八九〇年)、インフルエンザによる精神病治癒例(一八九〇年)。このようにならべてみると、三田の研究と島邨の研究とに、症状精神疾患、中毒精神疾患、脳器質疾患、身体疾患の精神疾患への影響など、共通する方向のものがかなりおおいことに気がつく。このほかに島邨は、いくつかの薬物についての論文抄録をかなりおおくつづけている。

一八九一年七月八日島邨は狐憑病取り調べのため島根県下へ出張を命ぜられて、一四日に出発、途中備後国尾の道に

よって調査し、二三日松江着。松江病院長山崎幹および島根県庁の協力をえて調査に着手。八月一四日には石見国にはいり、二三日には隠岐国にはいる。八月二八日松江着、九月二日帰京。この結果は「島根県下狐憑病取調報告」にまとめられて、『東京醫學會雜誌』第六卷第一〇号（二八九二年）から同第七卷第九号（二八九三年）にかけて計八回にわけて掲載された。島邨が留学にたったあとである。

島邨は一八九一年一〇月二四日自費でヨーロッパ留学にたった。この出発の日を一〇月二四日とするのは『大日本博士録』、吳秀三「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」（『東京醫學會雜誌創立二十五年祝賀論文』第二輯、一九一三年）、樫田五郎「日本に於ける精神病学の日乗」（『吳教授莅職二十五年記念文集』第三輯・第三輯・第四輯、吳教授在職二十五年祝賀会・東京、一九二八年）であり、東京府巢鴨病院資料で医員辞職の日付けが一〇月二四日となっていることもそれに一致する。「帰朝記事」ではともに一二月とされている。他方「履歴書」には一〇月五日とある。ところが『中外醫事新報』第二七八号（一八九一年一〇月二五日）に「医学士島村俊一君」として送別会記事がのっている。待医原田豊と同道でドイツ国へ留学するので、榊教授ほかの発起で一〇月一三日に送別宴会があり、参会は三宅秀、佐々木東洋、大澤謙二など六〇余名、吳、岩崎周作、大澤、安藤正胤、竹中成憲、榊の送別の辞があった、という内容である。これからみても一〇月二四日がもつともたしからしい（「履歴書」の前半記事にはどうもうなづけない点はいくつかある）。

留学中のことは二つの「帰朝記事」をまとめてみよう。島邨はまずフランスにいつてパリにしばらく歩をとどめたのち、ドイツ国ベルリンについて、そこで二年余りの修学をかきねた。講学の休みにはハレ、イエナ、エルランゲン、ウエルツブルク、ハイデルベルクなどの諸大学を巡視して神経病学、精神病科につき調査した。ベルリン大学では教授ヨリ(Friedrich Jolly, 一八四四—一九〇四、一八九〇年よりベルリンの教授より精神病学を、員外教授メンデル(Emanuel Mendel, 一八三九—一九〇七、一八七五年よりベルリンの員外教授)より神経病学を、またメンデルおよびメーリ(Karl Moeli, 一八四九—一九一九、一八九二年よりベルリンの員外教授)から刑事精神病学を聴講し、ジーマリング(Ernst Stenmeling, 一八五

七一九三二、一八八二年よりベルリンの員外教授)にも教えをうけた。神経学についてはオペンハイム(Hermann Oppenheim, 一八五八一—一九一九、一八八三年からベルリンの教授)、レーマーク(Ernst Julius Remak, 一八四九—一九一七、一八七五年からベルリンでポリクリニクをひらき、のち一九〇二年からベルリンの員外教授)、オイレンブルク(Albert E. Eulenburg, 一八四〇—一九一七、グライフスワルトの教授だったが一八八二年からベルリンで神経病ポリクリニクをひらいている)にしたがつた。また内科では教授ライデン(Ernst von Leyden, 一八三二—一九一〇、一八七六年からベルリンの教授) およびゲルハルト(不詳)につき、ことに神経病学を専修した。病理解剖はフィルホフ(ウィルヒョウ、Rudolf Virchow, 一八二二—一九〇二、一八五六年からベルリンの教授)についた。一八九四年にはライデンの指導で、上行性神経炎に因する脊髄炎の一例を発表した。またメンデルのところでは顕微鏡による検索をつづけていて、同年その指導で橋および脳脚の血行についての論文をだした。そのほかベルリンのダルドルフ癲狂院長ザンデル(Wilhelm S. Sander, 一八三八—一九二二) およびヘルツベルク国立癲狂院長(一八九三年より)のメーリについて、両院の患者に関する臨床をまなんだ。またワルダイエル(Wilhelm von Waldeyer-Hartz, 一八三六—一九二二、一八八三年よりベルリンの教授)に神経系解剖学もまなんだ。

つづいてウィーンにしばらくいた。ここでは教授クラフトエービング(Richard von Krafft-Ebing, 一八四〇—一九〇二、一八八九年よりウィーンの教授、この人の教科書がクレペリン前にはわが国の精神病学にもっとも影響をもっていた)の精神病学講義をきき、当時ワグネル・ヤウレク(Julius Wagner Ritter von Jauregg, 一八五七—一九四〇、一九〇二年からウィーンの教授、一九二七年ノーベル賞)が部長をしていたアルゲマイネス・克蘭ケンハウス精神科で臨床を見学した。また、わが国の留学生をおおそだてたオーベルштаイネル(Heinrich Obersteiner, 一八四七—一九二二、一八八二年ウィーン大学に所属する神経学研究所を自分でつくり、一八八九年から教授)の研究所^(四)で顕微鏡的研究をかさね、またストリッケル(Stricker, ウィーンに病理学研究所をひらいており、ワグネル・ヤウレクも一八七六一—一八八二年とそこで研究していた)にもしたが、ベッテンコーフェル(不詳)に神経病学をまなんだ。さらに内科教授ノートナーゲル(Hermann Nohnagel, 一八四一—

九〇五、一八八二年からウィーンの教授について神経学をまなんだ。ウィーンでの仕事は論文にはなっていない。いずれにせよベルリンおよびウィーンと、島邨は当時としては一流の人について精神病学、神経学をまなびてきた。

さて、島邨は鳥井春洋（同学年の人、内科）、山根元策（二八八三年東京大学医学部卒業、内科）、緒方銈次郎（緒方富雄先生父君とともに、一八九四年九月二四日イタリアのジェノア港でドイツ船バイエルン号にのり、香港でドイツ船ニルンベルヒ号にのりかえ、一月二日横浜についた。一月一八日にはこの四名および山極勝三郎の帰朝祝宴が上野松源楼でおこなわれた。

さらに、京都にうつることになった島邨の送別会が師榊ほかの発起によって二月八日比谷門外東京ホテルでおこなわれた。島邨は二月一〇日新橋発の汽車で任地にむかった。

二、その後半生

京都市の話はいつからあったものか。島邨は一八九四年（明治二七年）二月二日京都府医学学校教諭（京都療病院医員兼務）に就任した。担当は精神病学、神経病学および法医学であった（朝井元章が教諭であった一九〇一年五月から一九〇二年七月までは、神経病学および法医学は朝井の担当）。当時の校長・療病院長は五年先輩の猪子止戈^{しか}之助であった。当時の同窓生には猪子のほかに、富永（生理学・衛生学）、浅山（眼科）、加門（解剖学）、笠原（内科）、平井（内科、小児科）がいた。ここで島邨の法医学講義にふれておこう。精神科医療史研究会で入手している大條顯直（一九〇一年卒業）による法医学講義筆記録がある。その内容は法医検査法―生殖器関係―墮胎―外傷―致死創傷―自殺・他殺・誤死―血痕―毛髪―窒息死―殺児―死体現象、といった内容である。のちにみるように、島邨による一般の（精神鑑定でない）法医鑑定書ものこっている。

翌年二月一六日には島邨は療病院神経及精神科部長となり、神経精神科が独立した。一八八七年七月に療病院敷き地

東南隅の鴨川に接する四二〇坪ほどの敷き地をかこつて、平屋一八〇坪ほどの新病舎（精神病舎）が着工され、年末に完成。定員四〇名で、鎮静室（護体室）は六室。一八八八年一月から患者を收容した。当時の医科大学、医学校で専任の精神病学教授がいたのは帝国大学、京都府医学校および大阪府立医学校だけで、付属病院に精神病科があったのは愛知病院および大阪府立医学校病院（病室八、うち狂躁室三）だけであつた。帝国大学医科大学のばあい精神病病室は構内になく、東京府巢鴨病院を利用してゐた（このことへの評価はいろいろあるが、このことは医育機関内に精神病科を根づかせるのをさまたげる悪先例となつたとわたしは判断している）。そこでこの四〇床の新病舎は、医育機関に付属した精神病棟としてわが国で最初の本格的なものであつたといつてよい。さらに一八九九年七月には、担当教諭・部長の退職にともなつて療病院内科第二部が第一部に合併したのにもない、内科第二部診察場が神経精神科診療場にあてられた（外来が拡充されたのだろう）。

そして、学校、病院がガタついているなかで療病院神経精神科は患者数でも療病院の中心となつて、その経営をささえるにいたる。『百年史』に掲載されている患者数を計算しなおしてかかげると、**表三、四**のようである。

このころ精神科では外来は一般にひじょうに軽視されてゐた。東京府巢鴨病院についてみると、一八九四年の巢鴨病院規程並職務章程には「外来患者ノ治療ニ応スヘカラス」と明記されてゐた。規程がかえられて外来診療が四月一日からはじまつた一九〇四年の外来患者は新来一・三名、再来一九三名であつた。翌年九月から貧困者にたいする施薬の制度がもうけられたが、一九〇六年の患者は新来二・四名、再来一・〇二名であつた。これにくらべて京都府立療病院神経精神科外来の患者数の多さ（そのなかで神経病の患者がおおかつたのかもしれないが）は特筆されなくてはならない。それは島邨の学識および熱心さの賜物なのだろう。

精神病舎の運営にもみるべきものがあつた。伊東天真が一八八八年五月ごろの精神病舎の状況をしるしているところ（京都府立療病院附属新病舎の略記及所感）、『京都府醫學学校校友會雜誌』第九号、一八八八年）によると、「其初め室の北なるを男

表三 京都府立療病院1903年1-5月の患者累計(延べ)

	全 体	うち内科	うち神経精神科
入 院	18,248名	4,454名	8,788名
外 来	15,858	2,863	2,777
学用入院	7,265	1,664	689
計	41,371	8,981	12,254

表四 1901-05年の入院患者数・外来患者数推移(9月1-4日の延べ)

	全 体	うち内科	うち神経精神科
1901年	714名/636名	146名/135名	297名/118名
02	603/654	198/196	253/117
03	566/603	160/158	277/115
04	667/389	181/110	293/73
05	813/766	289/240	371/169

(入院/外来)

子部として其南なるを女子部と區別せしも後に男子の遙に女子に比して多きを以て即男女の別を廢して疾病の軽重により別てり。つまり、男女混合病棟の方式をとったのである。これは現在の精神科病院でも少数の病院で部分的に(あるいは試験的に)採用しているだけのものである。沈静室の内面には「ドーグルス」をはつて、患者が興奮して首肢をぶつけても怪我しないようにした。この「ドーグルス」がどういうものか不明であるが、これは療病院教師ヨンケルの説によつて内面にエラスチカゴムをはつたかつての京都癲狂院護護体室になつたものであろう。

新病室看病人および同室看病婦にたいする「看護人心得概略」が一八九九年二月二四日に府立療病院長猪子の名で訓示されていることが『百年史』にあげられている。「仮令患者狂躁暴行ヲ為シ又ハ看護人ヲ忿怒苦噴スルコトアルモ決シテ患者ヲ罵詈惡口シ或ハ苛酷ニ取扱フ勿レ此際ニアリテハ自身ヲ患者トナリ若シ人ニ看護セラルゝナラバ如何ト追考シ必ズ親切ヲ尽シ、患者ノ心痛ヲ為サザル様勉ムベシ」などと訓示するその心は鳥邨のものであつたらう。さらに助教諭佐々木恒一(一九一一年と教諭)が一九一〇年四月四日の第三

回日本医学会第一〇分科会（神経病学・精神病学）で報告した「精神病患者ノ看護法ニ就テ」（第三回日本醫學會誌）第三回日本医学会、大阪、一九一一年）には、京都府の私立精神病院取締規則には「看護人ハ男病室ニ男子、女病室ニ女子ヲ附スベシ」とあるが、島邨博士の経営する精神病室では、一部分の男子病者を女子看護人に依托して治療上可良の成績をあげている、とある。

島邨が精神科治療の考え方を直接にのべている論文はみいだせなかった。だが、すでにのべたように島邨は、ヒオスチンの効用についての論文および薬物についてのおおくの論文抄録をかいている。鎮静剤についてかなりの経験をかかっていたことだろう。また、のちにみるように、その精神病学講義では、「職業」（作業治療）が強調され、精神疾患でもかるい患者は一般病室で治療することもかんがえられる、とのべられている。こういう点から島邨は、戦前の精神病学専門の教授・教諭にはめずらしいほどに治療的方向づけをもった人だったと推察される。

一八九七年九月の京都府医学校規則（『八十年史』）をみると、修学年限四年のなかで、第三年級で神経病学一年間毎週二時、第四年級で神経病学前期毎週一時、神経病科外来及入院患者臨床講義後期、精神病学前期毎週三時、精神病学入院患者臨床講義前後期、法医学後期毎週三時、となっている。一九〇〇年卒業の今川鼎は「追憶」（『八十年史』）で、「島村先生は剛柔調和がとれて生徒をそらさぬ、さすがに神経科では東に呉秀三、西に島村俊一、当時我国斯界の双璧で、本学動揺の際能く善処されたものである。校内鴨堤の一部に精神病院の創設されたのも当時である」とのべている。

島邨門下のおもな人をひろつておこう。一八九三年卒業の朝井元章は広島県の出身、おそらく最初の助手であったろう。のち助教諭になり、神経病学の講義は朝井が一部分を分担していた。一九〇一年四月から一九〇二年七月まで教諭として神経病学、電気治療学を担当していた。のち京都市内に神経科を開業などしていたが、一九〇八年死去。一八九五年卒業の池田茂はのち船岡病院（精神科）院長となった。一八九九年卒業の川越直三郎は私立京都癲狂院（府立の京都癲狂院が移管された）の院長となり、川越病院として発展させた。おなじく土屋榮吉は岩倉病院（精神科）の院長として、

京都府の精神科医療ならびに医政一般におおきく貢献した。一九〇一年卒業の佐々木恒一については前記^(七)。一九〇三年卒業の野田浦弼は佐々木のあとをついで、一九一二—一九二六年と第三代の神経精神科教授となった。一九二一年卒業の久保昱二郎は一九二六—一九五一年と第四代の神経精神科教授となった。島邨がのちに校長・院長を辞職するとともに療病院の神経精神科はふるわなくなつた〔百年史〕が、それは一つには島邨門下による川越病院、船岡病院、岩倉病院などがのびていったからでもあつた。

つぎに京都における島邨の主要な研究業績をみておこう。癩性橈骨神経麻痺(池田廉三郎とともに、一九〇三年)、片山病による脳栓塞およびジャクソン癲癇(角田隆と共著、一九〇五年)、脳髓チストマ病(角田と共著、一九〇七年)、進行性延髄麻痺の病理解剖例(角田と共著、一九〇七年)があり、そのほかにいくつかの精神鑑定例がある。つまり京都での研究は病理解剖学的なものが主であつた。池田は外科担当の教諭であつた。角田は一八九五年に医学校を卒業し、一八九八年に内科から独立した病理学教室を設立し、のちに学長にもなつた。角田の学位論文はやはり日本住血吸虫病に関するものであつた。当時京都帝国大学京都医科大学病理学教室では藤浪鑑が精力的に片山病(日本住血吸虫病)について研究しており、島邨らの研究は藤浪との協力のなかですすめられたのだろう。



図 1906年の島邨^(八)

島邨は一九〇六年八月九日に京都帝国大学京都医科大学から医学博士の学位をうけた。これは当時の京都府立医学専門学校関係者としては最初のものであつた。学位論文となつたのは、「ドイツで書いた二論文、一九〇五年の片山病に関する論文および「汎性硬皮症の病理追加」(邦文であつた。しかし、最後の論文の原物はさがしだせなかつたので、一九〇六年八月九日の『官報』)のつたその要旨をあげておこう、——「本論文ハ病原及ヒ病理ノ不明ナル硬皮症ノ一例ヲ挙ケテ詳ニ臨床的觀察ヲ遂ケ死後之ヲ剖檢シテ各臓器諸組織ニ就テ一々解剖的及ヒ組織学的ノ所見ヲ記述セリ右ハ本病ノ研究

上有益ナル論文タルヲ信ス」。

さて、わたしがみた範囲で島邨による最後の論文は一九〇七年のものである。また島邨は一九〇八年四月四日の第七回日本神経学会で「癲癇の治療」の宿題報告をする予定だったが、病氣欠席している。このときは癲癇についていくつかの宿題報告が予定されていたが、島邨が治療面を担当していたことは注目しておいてよい。

京都府立医学校長としての島邨の活動をしるすことは本稿の主題ではない。といつても、この活動が島邨の後半生の三分の二をしめているので、『八十年史』、『百年史』によってそれに簡単にふれなくてはならない。

一八九五年に東京外に帝国大学を設置しようとの動きがでたのにたいし、一八九五年一二月京都府会は医科大学設置のため療病院、医学校を政府に寄贈してよいとの建議書を内務大臣に提出した。だが明治政府は医科大学はべつに開設する方針で、一八九八年四月には猪子（京都府医学校長）、三宅秀（元帝国大学医科大学学長）、坪井次郎（帝国大学医科大学助教授）および久留正直（文部技師）が京都帝国大学医科設計委員を命ぜられた。同一〇月浅山教諭（眼科）が、京都帝国大学へうつる予定で文部省留学生となつて休職。一八九九年にはいと、平井教諭（内科・小児科）が京都帝国大学へ転出のため退職。一八九九年七月三日には京都帝国大学医科大学におくべき講座が勅令でさだめられ、九月から医科大学は八講座で開始されることになった（京都帝国大学医科大学はのち、一九〇三年三月の京都帝国大学福岡医科大学の設置により、京都帝国大学京都医科大学と改称された）。七月猪木校長（外科）が京都帝国大学医科大学に転出して、加門教諭が校長事務取り扱いになり（九月より校長）、八月には笠原教諭（内科）がおなじく転出、九月に島邨は療病院副院長となる。

一 一月京都帝国大学医科附属医院が開設された。

一九〇〇年になると、五月に加門（解剖学）が京都帝国大学医科大学へ転出し、島邨が校長になった。一八九四年島邨の着任時医学士は六名いたが、そのうち富永兼棠（生理学・衛生学）は一八七九年にやめており、高山（産婦人科）が一八九五年就職。そして浅山、猪子、平井、笠原、加門が京都帝国大学医科大学にひきぬかれて、のこる医学士は島邨、高

山の二名だけになった。当時三名をこす医学士のいる医学校の卒業生は無試験開業ができた。いそいで医学士教諭を補充できないと、医学校の廃止につながりかねない事態であった。島邨にも引き抜きの手がのびたらしいが、島邨はふみとどまり、学校存続のために、まさに命をかけた努力をした。島邨にその道をえらばせたものがなんであったかはわからない。島邨のまえに校長として長年おおいに尽力してきた猪子が京都帝国大学にさったのは、京都府医学校は府立療病院のいわば付属的存在にすぎなく、教諭の公費留学の制度もないなどの実情に愛想をつかしたものらしい(『百年史』)。

島邨はまず、一八八一—一八八三年と療病院医学校教諭で当時京都市内で開業していた新宮涼亭(内科、一八八一年東京大学医学部卒業)を一九〇〇年六月によびもどしたが、新宮は間もなくやめた。九月には京都市立日吉病院長だった工藤(内科)を教諭にむかえ、三名の医学士は確保された。このような事態のなかで府会でも医学校の存廃が問題になったが、同年一二月一票の差で存続が決定された。一九〇一年末の京都府立医学校教諭表(『百年史』)では、島邨は内科理論及実験も担当している。当時の人材不足をしめすものである。一九〇一年には永井(生理学)が、一九〇二年には望月(内科)、伊藤(眼科)、池田(外科)が教諭に任ぜられて、医学士教諭は計七名となり、医学士問題は解決し、医学校の基盤はかたまつた。なお校名は一九〇一年九月に京都府立医学校と改称された。

島邨は一九〇三年五月に療病院院長を兼任した。同年三月には専門学校令が公布されたが、六月二〇日には京都府立医学校は文部大臣の認可をえて京都府立医学専門学校と改称し、療病院もまた京都府立医学専門学校附属療病院となつて、学校の優位性も確立された(なお、教諭が教授と改称されるのは一九一七年の公立学校職員制公布までまたねばならなかった)。医学専門学校に昇格したのにもない施設の拡充にも力がそそがれた(一九一四年一月には一〇か年継続の校舎・療病院大改築工事が完了し、一月二三日に新築落成祝賀式が盛大におこなわれた)。島邨は廃校寸前までおいこまれた医学校をささえきり、それを医学専門学校に昇格させたのである。島邨が同校の中興の祖とされるのも当然である。

いっしょにはたらいっていたのに京都帝国大学にさつていった同窓生を島邨はどうみていたのだろうか。「裏切り者！」

とかれらをはげしくにくんでも不思議ではない。だが、かれがとつたのは和解・協同の道だったようである。京都医学会は一八八六年に療病院内に結成されて、一八八八年一月に『京都醫學會雜誌』を創刊した。だが、京都帝国大学医科大学が設立されると、一九〇一年五月から休会状態となり、雑誌も七月の号をもって休刊となった。そして一九〇三年三月には京都医学会の解散が決議された。その残務整理にあたったのは、前年七月に教諭を退職していた朝井元章である。あたらしい京都医学会は京都医科大学内に設立されて一九〇三年三月二十八日にその発会式がおこなわれた。島邨は一〇名の理事の一人となって会計係を担当し、おなじく朝井も理事として庶務部を担当していた。島邨は一九一〇年の第七次総会のまえまで理事だったようである。協同の道を島邨にとらせたのは、京都医科大学にいる同窓生への友情だったか、それとも大局的に京都の医学を振興させようとの熱意だったか、それはうかがいしることができない。

対ロシア戦争にあたって島邨は一九〇五年一〇月、教諭の望月、工藤とともに毎週日曜大阪陸軍予備病院に陸軍衛生補助員として出張し、戦傷者の診療に従事した。一九〇八年一月六日には新装なった医学校講堂で、創立三〇周年記念式典が盛大におこなわれた(ただし、この三〇周年の起点があいまいで、その中には粟田口青蓮院で仮療病院の開院式がおこなわれた明治五年(一八七二年)一月一日を起点とすることになる)。

島邨は一九一〇年三月九日に校長、院長、教諭を辞職した。「島村校長を送る」と題した『京都府立醫學專門學校校友會雜誌』第五二号(一九一〇年)の文章には、「先生茲両三年遂に病痾の禍に罹り病状一進一退意の如くならず、校長の繁務其身に適せざるを知り、冠を脱して辞を乞はる」とある。前記三〇周年記念式典のときはすでに病いにおかされていたのである。神経精神科学担当の教諭には翌年五月に助教諭佐々木が昇格(だが佐々木は一九一二年五月に辞職し、助教諭野田が昇格)。校長・院長は望月がついだ。だが島邨は病褥にやすんずることをゆるされなかった。辞職の年の五月島邨は学校講師、附属療病院院長顧問、神経精神科部長となっている。佐々木教諭、野田教諭となっても部長は島邨というのは、かなり異様な事態である。島邨がいなくては病院がもたないということだったのだろうか。一九一一年に学校・病

院を見学した岡山医学専門学校四年生は、精神科病室の偉大なることを感想のなかにあげている（『八十年史』）。島邨は直接診療にたずさわる体力はなく出勤は不定であったが、望月校長をうしろからささえ、また神経精神科部長としての職をつづけていた。だが、一九一六年二月二八日に講師、顧問、部長を辞した（副部長になっていた野田教諭が神経精神科部長をついだ）。

翌一九一七年二月には島邨医学博士表頌会が組織されて募金し、同一月一日に島邨先生寿像除幕式がおこなわれた。当日はこう夫人、遊喜子母堂、実母中村花子刀自が出席したが、ご本人は発熱のため出席できなかった（この寿像はいまも京都府立医科大学構内にある）。島邨から学校へ一、〇〇〇円の奨学資金などが寄付された。京都府立医学専門学校は一九二一年一〇月一九日の文部省告示第四七一号をもって、京都府立医科大学への昇格が認可された。島邨はその報告をきくことができた。島邨の病いは一九二三年三月一〇日になって急につのり、三月一日に逝去した。満六一歳である。葬儀は三月一二日に黒谷本坊で執行された。法号は警香院峰馨日俊居士である。そのお墓は東京都の谷中霊園にあり、京都市の黒谷西翁院にはご位牌がおかれている。翌年三月一日には寿像前広場での一周忌追悼会につづいて、別会場で追弔記念講演会がおこなわれた。

島邨とこう夫人とのあいだに子はなかった。そのこう夫人は一九六三年五月四日に死去された。こう夫人の遺言に、旧宅を処分し、その資金から京都府立医科大学神経精神医学教室に寄付するようにとの一項があり、この島邨基金によって財団法人京都府医学振興会が発足した。現在、京都市上京区新烏丸通下切通上る新烏丸頭町の旧邸跡に「嶋村俊一邸跡」の記念碑（字は久保豆二郎）がたっている。

三、その論文と講義

すでにのべたように、島邨が目ざした精神科医療の方向は、今日にもってきてもそのまま通用するような、時代にす

こし先行しすぎたものであったようである（総合病院精神医学」といわれるものに、島邨の方向はちかいかもしいれない）。これからは島邨の論文によつてその研究業績を概観し、精神病学講義の内容にふれておきたい。他人の論文の抄録などをのぞく論文に通し番号をつけておく。また『東京醫學會雜誌』は「東医」、『中外醫事新報』は「中外」、『京都醫學會雜誌』は「京医會」、『京都醫學雜誌』は「京医」と略記する。

1、回帰狂実験。東医、第二卷第七号・第八号、一八八八年（はじめ一八八八年三月八日の東京医学会例会で報告）。回帰狂とは躁狂発作と鬱狂発作との交代性に出現する珍奇な精神病である。余が実験せる一八歳女および一八歳男の例をあげる。

2、ヒヨスチン功用実験。東医、第二卷第二一号、一八八八年（はじめ一八八八年一〇月一日東京医学会例会で報告）。ヒヨスチンの実験については薬物学教室助手猪子吉人の協力をえた。まずカエルの心臓につき迷走神経麻痺作用をたしかめた。余の実験ではヒヨスチンの瞳孔散大力はアトロピンよりおそく、その作用の消散ははやい。躁狂の患者六名にヒヨスチンを皮下注射して（一人では内服も）、鎮静・熟眠が確実にえられた（猪子による追加がある）。

3、情欲抑圧ノ精神並神経系ニ及ボス関係。中外、第二〇八号、一八八八年。情欲抑圧は神経・精神的健康に害をあたえるか、あたえるとすればどんな病状となるか。これについては諸説があるが、要するに「常人ニ向テハ抑圧ハ敢テ神経並ニ精神的作用ニ向テ著シキ害ヲ及ホス者ニアラス」。

4、大脳右半球ノ局部脳実質脳膜炎ニジャクソン氏癩癩ヲ誘発セル実験（神俣との連名）。東医、第三卷第六号・第八号・第一四号、一八八九年（はじめ一八八九年二月一四日東京医学会例会で報告）。はじめ二八歳で左顔面、左上下肢に痙攣をきたし、発作間に精神遲鈍、左上肢麻痺、ときに左下肢の麻痺も呈した例。三四歳で死亡し三浦守治により解剖、大脳右半球の局部実質炎、該部の慢性硬膜炎、軟脳膜炎などがみられた。生前は病巣は局部的と予想されたのに、右前頭葉の下後部、右頭頂葉の下部、右側頭葉の上部にひろがっていた。

5、水銀中毒ニ因スル精神症状。東医、第三卷第一七号・第二〇号、一八八九年（はじめ一八八九年六月一三日東京医学会例会で報告）。患者は二四歳の鏡職で、頭痛・腹痛・振戦・歯肉糜爛にくわえて精神変調をきたした。全身の振戦、狂躁状、幻視あり。ヒヨスチン皮下注で沈静（振戦もへる）。しかし三週間で退院したので精神症状、振戦の転帰はたしかめられなかった。患者の尿中に水銀を証明できた。

6、抜設土布氏病ト精神病ニ就テ。中外、第二三六―二三八号、第二四〇号、一八九〇年。第一患者は二一歳のときバセドウ病になって一旦治癒し、現在二四歳の女で入院時鎮鬱状、つづいて興奮状態になったが、全治退院。第二患者は一六歳にはじまった時発性躁狂の女で、バセドウ病を合併していた。巢鴨病院に入院した男の躁狂患者でバセドウ病を合併したものはまだみでない。

7、心臓病ト精神病ニ就テ（脊椎畸形患者ノ心臓右室拡張肥太ニ誘因セシ精神病ノ「カツイスチック」）。東医、第四卷第一二号・第一四号、一八九〇年（はじめ一八九〇年六月一二日東京医学会例会で報告）。一二歳より高度の脊椎彎曲ある男で、一七歳にはじまった躁狂状興奮症で入院、脚気を合併して死亡。解剖で心臓は代償性右室拡張肥太であった。おそらくそのため神経中枢部に血行異常あり、脳の慢性静脈充血をきたしていたものだろう。巢鴨病院における患者調査では、心臓病を合併せる者一五、合併せざる者一七で、心臓拡張肥太症が九名であった。

8、「インフルエンツア」ニ因テ精神病ノ治癒セシ実験（精神病ニ作用する熱性病ノ追加）。東医、第四卷第二二号・第二三号、一八九〇年（はじめ一八九〇年九月二五日東京医学会例会で報告）。精神病に作用する熱性病には一二種のもがあり、これについては三田の詳細な記述がある。インフルエンザが精神病の一誘因たることは神教授が演説した。巢鴨病院では今回四月一七日より六月下旬までに患者二五名（躁狂九、錯迷狂五、続発痴狂三、ヒステリ狂一、癲癇狂一、菅狂（？）一、道德狂一、白痴三、ヒポコンデル狂一）がインフルエンザにかかった。うち躁狂患者一名が全治し、ヒステリ狂患者一名が軽快した。全治した幻覚性錯迷狂患者（男）では下熱にともない軽快、ついで全治にいたった。熱の作用によるか。

9、拔設土布氏病ト精神病ニ就テ。中外、第二六八―二七一号、一八九一年。今回報告するのは男の聾啞者で、三七歳で誇大妄想を有する躁狂状興奮状を呈し、バセドウ病があつた。男のバセドウ病患者も精神病を合併することがあるのである。

10、島根県下狐憑病取調報告。東医、第六卷第一六号・第一七号・第二一号・第二二号・第二四号、一八九二年、同、第七卷第三号・第五号・第九号、一八九三年。この論文についてはわたしの「狐憑き研究史——明治時代を中心に——」(『日本醫史學雜誌』、第二九卷第四号、一八九三年)にくわしく紹介したので、要点だけしるす。島邨が現地で実際にみたのは人狐憑き二九名、犬神憑き(外道憑き)二名、狸憑き一名、野狐憑き二名の計三四名(男一三、女二)。診断としては錯迷狂四、躁狂四、ヒステリー狂およびヒステリー一五、酒精中毒症三、続発痴狂一、老人痴狂一、マラリヤおよびチフス三、関節炎一、肺癆一、卵巢のう腫一であつた。この論文は戦前・戦後を通じて憑き物の精神医学的研究では最高の論文であるのに、ほとんど評価されていない(無視されている)ことはのちにものべる。また、これは学位論文の第一にいれてよかつたとおもうが、ドイツでかいた論文を主論文にするという慣行に島邨もしたがつたのである。

つぎに、留学前に島邨がつくつた論文抄録(紹介)の題名をあげておく(掲載はいずれも「東医」誌)。「ジャクソン氏癲癇及精神病」(第二卷第九号)、「新催眠薬『アミーレンヒドレート』」(同)、「精神病患者ノ蛋白尿」(第二卷第九号)、「『アミーレンヒドレート』ノ催眠作用」(同)、「アンチピリンノ催眠作用」(第二卷第一五号)、「体質肥満(脂肪)ノ精神病ニ及ホス作用」(同)、「酒客譫妄症ニ於ケル『メチラール』ノ皮下注射」(同)、「精神病ト腎臓病」(第二卷第一六号)、「精神病患者ノ脳重量」(第二卷第一七号)、「精神障害ニ合併セル糖尿病」(第二卷第一八号)、「アルコール乱用ノ結果」(第二卷第二〇号)、「精神病伝染」(第二卷第二一号)、「『コカイン』ノ精神病ニ於ケル功用」(第二卷第二三号)、「『サリチール』酸ニ因スル精神的疾患」(同)、「含水コロラールニ因スル麻痺狂患者ノ吐血」(第二卷第二四号)(ここまで一八八八年)、「『コカイン』中毒ニ因スル精神変常」(第三卷第三号)、「『アンチピリン』中毒症状附之ニ因スル精神変常」(第三卷第四号)、「『ヒヨスチン』

ノ催眠作用」(第三卷第七号)、「咽喉実弗帝利亞躁狂ヲ治ス」(第三卷第一〇号)、「精神的癲癇」(第三卷第一三三号)、「精神病者ノ『ロピウム』療法」(第三卷第二二二号) (こゝまで一八八九年)、「躁狂患者ノ『オピウム』療法」(第四卷第二二二号)、「癲癇狂患者ノ裁判的関係」(第四卷第三三三号)、「『ヒヨスチン』ノ功用」(第四卷第五五五号)、「精神病ノ一二鎮靖劑ニ就テ」(第四卷第九九号) (こゝまで一八九〇年)。このように、島邨が抄録紹介した論文では、中枢神経系に作用する薬物に関するものが大半をしめている。

当時帝国大学医科大学精神病学教室では神教授が「精神病患者書類集」を『東京醫學會雜誌』に連載していた。それは「神俣報」として教室員の「記」となっている。第七例(錯迷狂の男)と第八例(固定妄想を有する進行性麻痺狂の男)だけは、神・島邨報、神記である(第三卷第二二二号)。あと「島村俊一記」となっているものをあげると、第一六例(大妄想の男、第三卷第八号)、第一八例(パッシーフ)鬱狂の男、第三卷第九号)、第一九例(大妄想および被害妄想を呈した進行性麻痺狂初期の男、第三卷第一〇号)、第二〇例(ヒポコンデル)性鬱愛狂の男、第三卷第二二二号)、第二四例(大妄想を有する慢性錯迷狂の男、有名なる蘆原將軍、第三卷第一五五号)、第二五例(大妄想をあらわした進行性麻痺狂初期の男、第三卷第一六六号)、第二六例(幻像を有する錯迷狂の男、第三卷第二〇号)、第二八例(被害妄想を有する錯迷狂の男、第三卷第二三三号)、第二九例(大妄想を有する躁狂だが進行性麻痺狂に転移するらしい男、第四卷第四四号)である。

このほかに島邨は東京医学会例会で「麻痺狂ト脊髄癆トノ関係」(一八八八年九月三日)、「インフルエンツァ」ノ為ニ精神病治療ノ媒介ヲ為セシ実験」(一八九一年六月二五日)の報告をしているが、これらは論文にはなっていない。

つぎに留学中の二論文であるが、その内容については学位記の論文審査要旨によって紹介したい。

11' Ueber einen Fall von Myelitis ex Neuritis ascendente. Zschr. kl. Med., Bd. 24 H. 5, 6, 1894, 附図五。ライデン教授のもとでおこなった研究で、右側下肢における神経炎の徴候をもってはじまり他側神経炎を発しついに下肢の屈曲硬直を呈した患者の剖検で、腰髄後根の変性、腰髄部より上行し胸髄上部にいたる灰白質および錐状路の変性を確定

した。

12' Ueber die Blutversorgung der Pons- und Hirnschenkkelgegend, insbesondere des Oculomotoriskerns. *Neurolog. Centralbl.* 13 Jhrg. No. 19, 21, 1894. 附図五。メンデルの研究室での仕事。カルミン液注入法で脳底脈管弓に、比較的短経路をとり脳実質に進入するものと、脳脚を還廻し背部にむかい深部に進入するものとを区別した。前者は中央部にどまり、後者は脳脚外部および四疊体部の血液供給を主とし、また両者の血管領域はあい吻合することはない。動眼神経核存在領域の脈管は終末動脈なので、該区域はしばしば罹患するのである。さて「加門演説」は「殊に動眼神経核の栄養血管に関する論文の如きは、最も有益なものであります」とこの論文を賞讃している。また「京医学会」誌第九一号・第九二号・第九五号（一八九五年）にのった「橋部及脳脚部殊ニ動眼神経核ノ血液供給ニ就テ」はこの訳である（図略）。

13、所謂片山病ノ病理解剖、脳動脈エムボリー及ビ「ジャクソン」氏癲癇原因ノ追加（角田との共著）。京医、第二卷第三号、一九〇五年（附図三、はじめ一九〇五年四月一五日京都医学会第一七例会で報告。患者は広島県深安郡川南町の農夫で、その開業医吉田氏より紹介されて入院したが、死亡。臨床的には、脳動脈エンボリーによる脳軟化にジャクソン癲癇を併発したものと推察された。病理解剖では脳、肺、肝臓に主要病変あり、顕微鏡検査上小血管内に多数の日本住血吸虫卵子栓塞し血管壁に炎症をおこしていた。寄生虫卵による脳髓の変化のほとんどは肺ヂストマ卵によるもので、日本住血吸虫卵によるものはこれまでに山極の報告があるだけである。

14、脳髓ぢすとま病ノ一例（脳髓中ノぢすとま、うえずてるまんにい母虫、脳腫瘍種類ノ一追加）（角田と連名）。東医、第二〇卷第三号、一九〇七年。附図四。脳髓のヂストマ性病変は本邦例だけで、島邨の報告例もある。解剖例も本邦での四例だけで、うちヂストマが脳髓に寄生したのは大谷例だけで、三例ではヂストマ母虫は肺に寄生しその卵が脳血管に栓塞したものである。今回報告例は一六歳男で、頭痛、精神昏瞶、嘔吐、眩暈、痙攣、視神経炎より臨床的に脳腫瘍

と診断、病理解剖学的には胸腹部にデストマに因する病変なく、大脳右半球の白質および正中核に一匹のデストマ母虫に因する軟化腔洞と脳圧高進による内脳水腫、視神経炎などがあつた。デストマ・ウェステルマンニイ母虫および卵子が脳髓だけに見られた点が、この例の特徴である。

つぎに島邨の学会報告をその抄録によつてみよう。

15、癩性橈骨神経麻痺ノ一例(抄録、池田廉一郎に連名)、神経學雜誌、第二卷第二号、一九〇三年(一九〇三年四月二日、日本神経学会第二次總會で報告)。一七歳女で三年前より橈骨神経麻痺。腋窩で肥厚した橈骨神経を切開し、その神経をしらべた。

ここで日本神経学会との島邨の關係をみておこう。上記第二次總會のあと島邨は一九〇八年の第七回總會で「癩癇の治療」の宿題報告をする予定であつたが、これは病氣欠席した。島邨が評議員をしていたことは『神経學雜誌』第二二卷第九号(一九二三年)の死亡記事にみられるが、評議員をしていた期間はたしかめられなかつた。また今村新吉(京都医科大学教授)および島邨の発起により、一九〇五年秋の第一回につづき一九〇六年四月一五日に、関西精神科に關係あるものの第二回懇親会が京都でひらかれた(『神経學雜誌』第五卷第三号、一九〇六年)。年二回の予定で発足したこの懇親会のその後はたしかめてない。

あたらしい京都医学会關係では、つぎの二報告がある。

16、一患者ノ「デモンストラチオン」。京医、第二卷第四号(会報)、一九〇五年(一九〇五年九月一六日京都医学会第二〇例会第一席演説)。肺デストマ卵による脳動脈エンボリーおよびジャクソン癩癇の例(咯痰でデストマ卵を確認したことから推定)(14で言及されているのはこの報告である)。

17、進行性延髓球麻痺研究予報(角田と共著)。「京医」第四卷附録京都醫學會第四次總會誌(一九〇七年五月一八日京都医学会第四次總會報告)。五八歳で全経過一年で死亡した。知覚障害を有する進行性延髓球麻痺兼筋萎縮性側索硬化症の一

例で、こういった例は文献上数例だけである。

鑑定例をのぞく、その他論文、講義にはつぎのものがある。

18、「アンチピリン」中毒症ノ小実験（医学士研生名義）。京医会、第九六号、一八八五年。アンチピリン薬疹の四例の経験。

19、男性歌私的里性聾者ノ一治験。京医会、第一〇四号、一八九六年。二二歳の男で重聴あるいは聾の発作があつた（未完）。

20、脳性小兒麻痺兼ジャクソン氏癲癇ニ穿顱術ヲ施コセシ一例（猪子止戈之助と共同の講義、土屋榮吉抄録）。京医会、第一五四号、一九〇〇年。四歳で右半身につよい痙攣と右半身の麻痺とをきたした例で、六歳四か月のとき減圧手術を示説（死亡）。

21、臨床講義（鉛毒麻痺）（土屋榮吉筆記）、京医会、第一五七号、一九〇一年。三四歳の俳優で鉛毒性麻痺を呈した。

22、原因に就て多くの報告に接せざる脳動脈栓塞及びジャクソン氏癲癇患者の一例（講義、立石重人誌）。京都府立醫學専門學校校友會雜誌、第三九号、一九〇五年、16と同例（なお、この校友會雜誌にはほかにも二、三の講義筆記がのつていますが、充分にしらべきれなかつた）。

つぎに鑑定書をあげておく、発表はいずれも「京医会」誌である。「挙動犯者精神状態の鑑定」（第九二―九四号、一八九五年）。対清国戦争に際し不遜の文書を大臣あてにおくつた、不全白痴で妄想をもつた男。「刑事被告人精神状態の鑑定」（京都府監獄医務所長大島甲子郎に連名）（第九六号、一八九五年）、対清国戦争に際し巡查を敵国人と誤視して傷害した男、まえに狐憑き状態になつたことあり、今回は酒精中毒に因する一時的精神変調（これは『京都醫事衛生誌』にも掲載されている）。「嬰兒謀殺事件鑑定書」（第九七号、一八九六年）、生後二か月の嬰兒死体で、致命原因は絞殺と鑑定（いうまでもなく、これは一般法医学の鑑定書である）。「鑑定書」（大島甲子郎と共同鑑定）（第一〇一号、一八九六年）、姉の子を絞首した男

で、興奮性鬱憂性で虚無妄想観念を發し鬱狂性兇猛発作で犯行におよんだ。「鑑定書」(京都府監獄医務所長章野信一郎と共同鑑定)(第一一四号、一八九七年)、錯迷狂で暴力行為におよんだ男。「殴打損傷被告人ノ精神状態」(第一一六号、一八九九年)、酒精中毒性精神病による嫉妬妄想で妻を殴打した男。「準禁治産事件ニ付キ精神状態鑑定一例」(第一四五号、一九〇〇年)、酒精性中毒性麻痺狂の男。「故殺被告事件鑑定一例」(第一五二号、一九〇〇年)、父と姦通しているとの嫉妬念慮(固定妄想にはいたらぬ)から妻をころした男で、軽度の先天性精神發育不全であるが、精神病的発揚発作はない。

これらのほかにも論文はあるかもしれないが、島邨は校長となるにおよんで、比較的ちいさな著作にさく時間もなくなり(また『京都醫學會雜誌』は一九〇一年なかばから休刊)、さらに病氣のために、論文はかけなくなつたことがわかる。つぎに島邨の精神病學講義の筆記録をみよう。さいわい三種類の筆記録をみる事ができた。鈴木重次(一八九九年卒業)のもの(小関恒雄氏所蔵)、大條顯直(一九〇一年卒業)のもの(精神科医療史研究会所蔵)、富井眞垂(一九〇三年卒業)のもの(杏雨書屋所蔵)の三種である。ここではまず、筆記録によつてもとの講義につき論ずるさいの問題点をあげておかなくてはならない。筆記録とはその人のためのものであつて、他人にみせることを目的とはしていない。また昔の人の達筆のためもあつて字はしばしばよみとりにくく、こまかい内容をよみきれない。筆記者の理解程度によつて、講義内容がゆがめて記録されることもある。じつはこの三種の筆記録のどれもが、たいへんによみとりにくい字でしるされている。またとくに鈴木のものでは、「躁」がケモノ偏で、「観念」は「感念」、「妄想」が「忘想」、「錯迷狂」が「昔迷狂」、「誘因」が「誘引」とかかれるなど、誤字が目だつていて、講義理解の程度をうたがわせるほどであつた。三種の筆記録を通じて、島邨は日本語で講義し、いくつかの専門語だけドイツ語をいれていたことがわかる。

これら筆記録のくわしい紹介は精神科関係の雑誌にだすことを予定しているので、ここではまず島邨講義にみられる疾患分類をあげておく(でている疾患名は三種筆記録ですこしずつくいちがうが、適当にまとめてみた)、――

單純精神病 (Psychose ohne Intelligenzdefekt)

躁狂（時発性、回帰性）

鬱憂狂

幻覚狂又幻覚性精神錯乱症（アメンチア）〔富井筆記録にだけ〕

ノイラステニー精神病

昏迷狂（ストウピディテート、急性痴狂）

錯迷狂（パラノイア）

急性幻覚性錯迷狂

慢性幻覚性錯迷狂

急性単純錯迷狂

慢性単純錯迷狂

強迫観念性精神病

合併精神病、とくに両性回帰狂（躁狂、鬱憂狂の合併せるもの）

精神欠陥ある精神病（Defectpsychose）

先天性

白痴、不全白痴、軽度の不全白痴（最軽白痴）

後天性痴狂

麻痺狂

老人痴狂

癲癇性痴狂

ヒステリー性及ヒステリー性癲癇性精神病〔富井筆記録だけ〕

アルコール性痴狂

続発痴狂

問題はこういった分類体系はだれのものにならっているかであるが、この点は未解決である（クレペリン体系導入前のわが国の精神病学講義で、これに類した分類がしばしばみられるが、その淵源についての推測は別稿にゆずりたい）。なお、島邨がのちにクレペリン体系をとり入れたかどうかは、いまの段階ではたしかめられなかった。

治療の面で島邨は、当然ながら藥物療法をかなりくわしくのべている。また治療の場として「通常病院」、「一般病院」もあげ、作業治療をかなり重視し、患者の取り扱いにおいてかなりこまかい配慮をみせている。

まえにひいた伊東天真「京都府立療病院附属新病室の略記及所感」（『京都府立醫學校校友會雜誌』、第九号、一八九八年）は、新病室第一年の一月九日から五月二日にいたる「入院患者統計表」をあげている。その病名はさまざまに表現されているので整理にひじょうな困難を感じるが、やや強引にまとめるとつぎのようになる、――

躁狂男一四女三（單純性躁狂男四女一、躁狂状発揚男四、忿怒性躁狂男一、幻覚性躁狂男三女一、躁暴狂男一、慢性躁狂女一、
回帰性躁狂男一）

鬱憂狂男六女二（鬱狂男一、軽度鬱狂男一女一、幻覚性鬱狂男三女一、鬱憂性的機嫌男一）

錯迷狂男一六女二（單純錯迷狂男六、幻覚性錯迷狂男一〇女二）

強迫観念性精神病女一

不全白痴男二

麻痺狂男一

麻痺狂兼アルコール中毒男一

慢性酒精中毒男一

続発痴狂女一

癲癇性続発痴狂男一

急性譫妄症男一

ヒステリー性幻覚症女一

脳脊髄散在硬化（躁状）男一

数え方によつてこの数字はかわるだろうが、前記分類の実際はこれによつてうかがうことができよう。

四、その悲運

わたしにとつての島邨は精神病学者である。帰国後の島邨が精神病学界で充分に活躍できなかったのは、一つには、かれの力の半ばをこすものが医学校の存続にむけられていたからである。狐憑病現地調査をまとめあげた偉才が精神病学面で目だつ活動ができなかつた悲運と、医学校を存続させそれを医科大学にまでみちびくことができた成功とは、表裏一体となつてゐる。だがここには島邨のながい病氣という二つ目の悲運がからみついてゐる。その病いがなければ精神病学界においても島邨はもつとおおきく活躍したに相違ない。

ではその病いはなんだつたらうか。いろいろにさぐつたが、はつきり解答はみいだせなかつた。門弟の一人土屋榮吉のかくところ(二〇)でも、この点はふれられてゐない。すでにくりかえしふれた、島邨が一九〇八年四月の第七回日本神経学会總會宿題報告をひきうけていながら病氣欠席したあたりが、その病いの始まりであつたらう。まえの写真にみるとおり、島邨はやせ型の人であつた。一九〇八年はじめの発病とみて、一〇年ちかくたつた寿像除幕式には発熱で欠席し、発病からほぼ一五年でなくなつた。島邨の病氣にふれてゐるのは三輪徳寛『三輪珍談百題』（鳳鳴堂書店・東京、一九三三

年)だけで、その「禿頭物語」に「東大出身者で頭の全く禿げたのは、私より前に二人あります。一人は既に故人となられた島村俊一といふ人であります。此の人は後に再び頭髮が生へました」とある(三輪は一八八六年東京大学医学部卒業、千葉医科大学学長をつとめた)。島邨が一時はかなり衰弱した状態にあったことがわかる。島邨の病気は結核性のものでなかつたらうかと推測してみたが、どうだろうか。ながく、おもしろい病いという島邨のこの悲運は、医学校存続のために無理をかさねたことによるものだろう。

島邨のもう一つの悲運は、その主要業績の一つ狐憑病調査報告が無視されていることである。わたしの「狐憑き研究史」にのべたとおり、狐憑きに関する本格的医学的研究の最初といえるものはベルツの「狐憑病新説」(一八八五年)で、つぎが島邨のもの(一八九二—一八九三年)、神俣のもの(一八九三年)、荒木蒼太郎のもの(一九〇〇年、これも徳島県での現地調査による)で、門脇眞枝『狐憑病新論』(博文館・東京、一九〇二年)がこれらのあとにくる。くりかえすが、島邨は島根県という狐憑きの本場で計三四例の患者をみているので、もつとも本格的な研究である。ところが『狐憑病新論』が精神医学的狐憑き研究の最初のとされるのである。門脇は島邨の研究をしばしばひいているので、『狐憑病新論』をひく人がその内容をちゃんとよんでいれば島邨の研究に気がつくはずである。島邨の研究が当時かなりしられていたことは、チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)の『日本事物誌』(Things Japanese、一八九〇年初版、一九三九年第六版)の「狐憑き」の項に、「帝国大学助教授の島村博士(ベルツ博士の助手)は、この夏にこの地方を調査し、三一を下らぬ症例を見たのである」という一八九一年の『日日新聞』記事を引用していることからわかる(チェンバレン、高橋健吉訳『日本事物誌』、東洋文庫、平凡社・東京、一九六九年)。

門脇のものは単行本で、博文館の発行なのでかなりの部数がでたことだろう。他方『東京醫學會雑誌』のふるい号にのっている論文がしばしば無視されることは、島邨論文にかぎらない。憑き物について最近では谷川健一責任編集『憑きもの——日本民俗文化資料集成・7』(三一書店・東京、一九九〇年)がで、そこには憑き物研究の第一人者石塚尊俊が

「第七卷憑きもの——解説」をかいている。ここにも「明治三十五年に公刊された門脇眞枝の『狐憑病新論』がその（精神医学的研究の）草分けである」とある。石塚はわたしの「狐憑き研究史」の別刷りをうけとつて、礼状をよこしている。門脇とおもいこんだ頭は島邨をうけられないのか、それともわたしの論文をちゃんとよんでくれなかつたのか。精神医学者についてみても、一九九〇年に発表された祈禱性精神病についてのある論文は、わたしの論文を文献にあげながら、本文中では憑き物研究は門脇にはじまるとしている。引用しながら、わたしの論文をよんでいないのである。精神科関係では、ふるい文献についての探索が一般にひじょうによわい。

島邨の研究をわすれさせたのは、こういった学問的不誠実さである。そのような国にあつたことが、島邨の悲運の一つの原因であつた。

間もなく、島邨が京都に赴任して満一〇〇年になる。この論文はその記念論文としてわが先輩にささげたい。

本論文の要旨は一九九一年六月一日京都市における第九二回日本医史学会総会（杉立義一会長）で発表した。この論文作製にあたりご教示、ご援助をくださりあるいは激励してくださつたのは、島村湘一郎様（島村鼎甫の妹島村てい様曾孫）、奥沢康正（京都市）、奥村美都子（京都府医学振興会）、加藤伸勝（前京都府立医科大学教授）、小関恒雄（新潟大学）、佐野豊（京都府立医科大学元学長）、宗田一（京都市）、津下健哉（広島市）、長門谷洋治（堺市）、藤田俊夫（京都市）、横田穰（大阪市）吉岡眞二（精神科医療史研究会）の諸氏および杏雨書屋である。記して心からのお礼をもうしあげる。

注

- (一) 津下健哉「島村鼎甫とその訳書『生理発蒙』『創夷新説』など——江戸末期から明治初期の洋書翻訳」『広島医学』四三卷(第二号)、三三八—三四二ページ、一九九〇。
- (二) 奥沢康正「藤原鉄太郎を中心とした藤原家・島村家略系図」日本医史学会関西支部春季大会報告(一九八五年七月一日)。
- (三) 津下、前掲論文追加事項。
- (四) オーベルシタインの後継者 Otto Marburg の“Zur Geschichte der Wiener neurologischen Institute”(Arch Neurol Inst Wien 15: VI-XXIII, 1907) がのせる門弟名簿に Shimamura S. の名がはいっている。
- (五) 一八九五年より府立療病院と改称。
- (六) 岡田靖雄『私説松沢病院史』六〇三ページ、二七九ページ、岩崎学術出版社、東京、一九八一。
- (七) 佐々木が教諭となったか助教諭でおわったかについて、『八十年史』、『百年史』とも両様の記述をしている。教諭とはなつたが部長にはならなかった、ということなのだろう。
- (八) この写真は島邨の学位取得をいわつて門第の土屋榮吉、川越直三郎、佐々木恒一、野田浦弼、原志免太郎、伊達謙吉、杉村剛、喜多川六三郎が献呈したものである(京都府立醫學専門學校校友會雜誌、第四二号、一九〇六年)。
- (九) この懇親会には、当時八十有余歳の京都精神病学界の最長老高松彝がまねかれ、かれへの謝辞がのべられた。高松は府立の京都癲狂院—私立京都癲狂院につとめたのち一八九八—一九〇五年と京都府立療病院神経精神科で医務に従事した。また一九一一年には全漢文の『精神病学綱要』をだした。島邨より四〇歳ほど年上の人だが、参与のような形で島邨の神経精神科運営をたすけていたのだろう。『精神病学綱要』もいざれ機会をみて紹介したい。
- (一〇) 土屋榮吉「京都に於ける精神病者医療施設の回顧」『京都醫事衛生誌』第四九九号、一—四四ページ、第五〇〇号、一七一—一九二ページ、一九三五。土屋榮吉「島村俊一先生」(わが師わが友・130) 『日本醫事新報』第一四〇一号、三三三—三三六ページ、一九五一。

追記

山陰からラフカディオ・ハーンが狐憑き・犬神などのことをチェンバレンに報告していたこと(牧野陽子『ラフカディオ』)

イオ・ハーン』〔中公新書〕中央公論社・東京、一九九二年）からすると、島邨の調査についての情報もハーンによってチェンバレンにつたえられていたのかもしれない。

精神病舎建設前には、島邨が一般病棟で精神病患者を治療していたことが、学校・療病院の予算を審議した府議会議事録からよみとれる。

一九一〇年の講師・顧問・部長囑託につきときの望月校長は知事あて上申書で、島邨がみている患者がいまなお多数で、引き続き診療するかどうかは病院「経済上至大ノ関係ヲ有スル」ことを理由の一つにあげている。

（精神科医療史研究会・東京）

The Life of Prof. Dr. Shun-ichi Shimamura (1862-1923) A Distinguished Psychiatrist of Misfortune

by Yasuo OKADA

Graduating from Tokyo Imperial University School of Medicine in 1887, Shimamura studied psychiatry under Prof. Hajime Sakaki. In 1891 he investigated fox-possession in Shimane Prefecture. In 1891-94 he studied psychiatry and neurology in Berlin and Vienna.

Coming back in 1894, he was appointed Professor of Neuropsychiatry at Kyoto Prefectural Medical School. At the foundation of the Medical School of Kyoto Imperial University in 1899, many professors moved from Kyoto Prefectural Medical School to Kyoto Imperial University. The existence of Kyoto Prefectural Medical School hung on a hair. As the director of the medical school, he strived hard for the existence of the school and attained his object. But the overwork led him to severe and long illness. The philosophy of his psychiatric care was near to that of the present-day general hospital psychiatry. In Kyoto he had not enough time for psychiatric research. His name as a psychiatrist has been forgotten, together with his investigation of fox-possession.